

再開された労働者党の闘い

政治的詐欺師・安倍一派の虚妄の“大勝利”

17総選挙は、安倍一派が公示前の議席を維持するという圧勝に終わった。しかしその「勝利」がいかに偽りのもの、不当なものであるか、どんなに不正な手段で獲得されたものであるかは、安倍一派の政治や政策を問う前に、朝日新聞のまとめた以下の記事からも明らかである。「投票しなかった人を含める全有権者に占める自民の絶対投票率は、小選挙区で25%、比例区で17%。自民に票を投じた人は選挙区で4人に1人、比例区で6人に1人であったが、結果として全465人議席の6割を占めたことになる」。

不正義な安倍の勝利

つまり安倍政権の勝利とは国民のたった17%の支持によるものでしかない。安倍らは、それは決まっている制度によるものだから正当だと常に開き直るが、こんな制度が民主主義のどんな観念とも一致しない、不正、不公平なもの、直ちに換えられ、ただされなくてはならない邪悪なものであるのは余りに明らかである。

そもそもこんな政治も権力をも歪め、墮落腐敗されるような最低の制度は、自民党政権や支配政党が、自らの権力を維持するためにでっち上げ、作り出してきた利己主義の結果にすぎない。我々は安倍政権の勝利は国民の本当の支持を得ない、不正なもの、“非合法的”のものであって、労働者、勤労者は今こそ、選挙結果に関わらず、この政権を打倒するために直ちに総力を挙げた闘いの準備を始めるべきだと呼びかける。

我々は選挙後のマスコミの報道の中で、この選挙期間中——その後も——、全国で“小泉フィーバー”が吹き荒れ、安倍一派の勝利の最大の功労者は小泉だ、大したものだ、近未来の総理だ等々と大げさにいいはやされ、持ち上げられていたことを知った。

しかし我々は、そんな情況など無頓着に、小泉のお膝元で、小泉批判を真摯に、そして執拗に繰り返し、彼の政治の空虚と幼児性、軽薄さと反動性を容赦なく暴露し、告発しつつあったのである。

奇妙な、そして興味深い歴史の現実であり、一こまではあった。

我が党の歴史と17総選挙参加決定について

我々の組織はある意味で、労働者の現在と未来のために闘うことを決意した労働者活動家の、余り大きくないサークルであって、当初はサークルとして出発し、国政選挙に参加するため、1980年代、党に移行した。

しかし、国政選挙参入という最初の挑戦には敗れ、挫折し、再びサークルに後退したが、さらに15年の沈潜の時期を経て、今年4月、労働者の党を再建したばかりの組織である。

党だ、サークルだ、また党だと一体何をオタオタしていたのかとおしかりを受けるかも知れないが、我々にも色々な事情もあり、多くの困難や苦悩もあった。

しかし我々は、歴史によって課せられた自分たちの責務を一時といえども忘れたことはなく、常に「捲土重来」を誓ってサークルとして活動してきた。

そして安倍政権が継続し、政治経済における危険なポピュリズムがわが物顔ではびこり、ファシズムの空気さえ空気中に漂い始めている、昨今の危惧すべき客観情勢も確認し、安倍政権の弊害が限界に達し、その破綻が近づいているいま、我々は労働者党の再建と選挙闘争への復帰を決意した。

そして4月の結党大会では、5年以内に——つまり遅くとも5年のちの参院選において——、あ

るいはそれ以前にも、国政選挙あるいは地方選挙に参加しつつ、最初の労働者・働く者の国会議員を生み出す展望を明らかにし、まず皮切りに、次の総選挙に参加し、突破口を切り開くことを決定したのであった。

そして選挙区と候補者の決定を数ヶ月後までに、つまり秋までに決定するとして、いくつかの都道府県の支部や黨員などと話し合い、検討してきたのだが、選挙区を担うという都道府県組織も、候補者になって闘うというという仲間もなかなか出なかった。

そして誰もいなかったら代表委員会が責任を負うことが大会で確認されていたこともあって、代表委員の1人、坏が「誰もいなければ誰かが(自分が)やらなくてはならない」と決意し、ようやく選挙区と候補者が決まったのである。

そのときはまさに、安倍が総選挙を10月にやると決意する直前のことであって、我々が臨時大会を10月9、10日に開催して——奇しくも、総選挙の開始の日——、総選挙に坏のふる里から——つまり坏が小中高も卒業し、大学で教員免許証も得て、ふる里の三崎高校で教師としての人生をスタートさせた神奈川11区から——立候補することを、正式に承認すべきときのことであった。

我々は候補者と選挙区を大会の確認を得ないとしても、いつ選挙があってもいいように、万全の準備を確認、9月から事務所の設立、選挙カーや事務所用の電話、パソコン、テレビ等々の確保と設置などを備えることなど、最低の具体的な仕事を始めたのだが、まさにその直後、安倍の10月中旬の告示、総選挙という報道が飛び込み(9月17日)、約1ヶ月の嵐のような選挙闘争に突入していくことになったのである。

立ち後れ、安倍にしてやられたというか、ギリギリ間に合ったかというか、それは微妙だが、しかし遅れといっても実質数日のことにすぎず、結局、選挙闘争に復帰し、原則的に、そして徹底的に闘い抜いたというすがすがしさと満足感は、今はある。

もう1週間つまり20日ほどの期間があれば……

得票率1・6%、3133票という結果については、有権者の反応や我々の手応えからいえば、もう少し票があってもよかったという残念な気持ちももちろんあるが——しかし12日の選挙期間は、我々の党のことや、我々の主張が浸透し、支持につながるには余り短かった。せめてあと1週間あれば、そしてまた我々の組織力や財力がもう少しあれば、3%、5%の得票を得ることは十分に可能であったというのが実感である。

我々の選挙にたいする姿勢というか、基本的な性格は、「まじめに」、「愚直に」やる——これは安倍の言葉だが、安倍はただ有権者を欺くためののみ、まじめや愚直を語り、装ったにすぎず、彼の選挙は不真面目と愚劣そのものであった——、ということであった。

我々のような「ポッと出の」組織が、浮かれ、表面だけ飾るような「ポピュリズム的、闘いに走り、墮したら、1票さえ入らなかったことは確かであった。

我々の闘いは事前の23日からの活動も入れて、きっちり1ヶ月だったが、安倍政権と小泉の政治と政策を根底から、具体的に、しかも全体的に暴露するものであって——もちろん、選挙闘争という枠内のものであったが——、それは『海つばめ』前号(建前は約18万戸の全戸に配布された選挙公報と、3・5万枚新聞折り込みで配布された個人ビラ1号)と今号(同じく配布された3・5万枚の個人ビラ2号)に詳しいので、是非読んでみて、我々の闘いの全容を確認し、知ってほしいと思う。

安倍政権打倒や小泉粉碎を街頭演説や選挙カーで呼びかけ時も皆、おおむねこうした内容や性格でおこなわれた。

労働者党の闘いとして、恥ずべきものの全くない、何のものにもひるみ、怖じけることのない、真剣で、一貫した、しかも堂々たるものであったと、我々は確信できる。

政治闘争から逃走した小泉

我々は、安倍と小泉のまがまがしい政治に対する毅然とした批判を貫徹したが、小泉からは何の反論もなかったが、それは小泉の闘いの不真面目さといひ加減を暴露しただけであろう。

我々の闘いは安倍政権や小泉に対する、真剣で、まさに政治闘争そのものであり、政策を問い、正否を議論する活動であり、小泉がいくらかでも誠実な人間なら何らかの反論があつてしかるべきだったが、何の議論も反論もなかった。

一つのエピソードを明らかにすれば、選挙戦半ばの昼どき、久里浜駅頭で我々と小泉の候補者カーが鉢合わせし、交渉——というより、向こうから申し出で——彼らと我々が5分間交代でしゃべるといふ約束が成立したときがあった。

何しろ小泉はこの1日しか自分の選挙区に帰らず、あとは全国を忙しく飛び回っていたという話だから、両候補が鉢合わせしたのは、すごい奇跡のような偶然であった。

我々はもちろん小泉の「全世代的」社会保障論やこども保険などの政策を批判して発言したが、小泉は現場にきていて、商店街あたりに出没していたということだが、選挙カーではしゃべらず、ウグイス嬢が何の内容もないことを5分間、しゃべるだけだった。一体小泉は、何を思って5分間ずつの交代の演説を提案してきたのであろうか。いずれにせよ、我々の正当な批判に対して答える必要を認めなかったのか、まともな反論ができなかったのか、彼の支持者の動員もない、そんなところで演説する必要を認めなかったのか、どちらか分からないにしても、逃げたのだから？ 大した人間でないと結論するしかない。

選挙を終わって、小泉が安倍以上の安倍政権の広告塔として、マスコミの寵児として、全国で安倍政権の宣伝マンとして持てはやされ、将来の首相として騒がれ——本人もそれを自認し——、今回選挙の「今をときめく、花形だったことを確認したが、我々は興味深い候補者と愉快的闘いをしたものである。

もちろん、小泉は我々の選挙公報や選挙ビラでの批判に対して、「大人の対応」をして、我々の独り相撲になったのではあるが、客観的には、それは小泉が卑怯にも逃げたからであつて、我々のせいではない。真剣な議論を避けたことは、小泉にとって自慢できることではない。彼にとって、真剣な選挙闘争などというものは存在しなかったのである。世襲のエリート政治家、お坊ちゃん政治家、甘ちゃん政治家の根っこが暴露された。

これも我々の候補者の坏が11区をふる里としていた偶然のたまものだが、記念すべき、一つの「歴史的な」経験であつた。

そういえば、選挙前のマスコミとのインタビューがあり、11社来たうちに、「11区で立候補するのは話題づくりのためか」と、いかにもいやらしい調子で質問した記者もいたが、我々は相手が小泉であろうと、他の候補者であるかにかかわらず、自民党の候補者と対決し、追い詰めるということ以外、何も考えていなかったし、選挙戦の内容も「話題づくりのため」などという契機や内容はまるでなかったことは、『海つばめ』掲載の我々の選挙公報やビラを読んでもいただければ直ちに了解いただけるであろう。

そもそも我々には神奈川11区で闘う以外の選択肢は全くなかったのである。

外から見れば、確かに得票率が80%前後である小泉に挑戦するのは、風車に突撃するサンチョパンザ(つまり無謀なピエロ)に見えたかも知れないが、我々はそんなことは何も気にせず、安倍政権と小泉との闘いを貫徹することだけを考えていた。

我々の闘いの意義

考えてみれば、289の小選挙区の中で、我々のような選挙闘争を貫徹し、やり遂げようとした党派は我々を除いて皆無であり、「全世代型の」社会保障という愚劣な思いつきや、幼児教育の無

償化とか、こども保険などのインチキで、新手のバラまき政策と真剣に闘った政党や候補者も全くなかったといえる。

というのはすべての政党が——共産党も含めて——、色合いや細かい差異はあっても、基本的に安倍の消費増税の使い道変更や、消費増税の一部を教育の無償化という名の新手のバラまきに転用するという、ふとどきな政策——総選挙を強行した、安倍の口実——に反対しないばかりか、それに賛成だとするなら、真剣でギリギリの政治闘争はなかったに等しいからである。

そんな中で我々のみが、2年のちだという——2年のちの話なら、いま総選挙をする理由など全くなかったのである——、消費増税の使途変更といった、とんでもない道外れの邪道政治や、トンチンカンで、有害なバラまき政治に公然と反対して立ち上がった意義はいくら強調してもしすぎることはない。

とりわけ表面だけはいくらももらしいことを美辞麗句にくるんで振りまくだけの小泉の雑で、無内容な政治や政策——単に労働者の厚生年金などの保険料を引き上げて、労働者の余計な負担で、それを財源にして幼児教育無償化をやるといった「こども保険」構想とか、「全世代型の社会保障」といった愚劣なもの——を徹底的に暴露して闘った意義はいくら強調してもし足りないだろう。

我々は小泉と闘うことによって、同時に安倍政権ともとことん闘ったのであるが、そんな選挙区は全国どこを探してもなかったことだけは確かである。

そして我々の闘いは今回で終わるのでなく、さらに全国の闘いとして受け継がれ、展開されて、5年後の労働者議員の誕生まで止むことはないのである。

闘ってみて、神奈川11区ほどの特異で、奇妙な選挙区はなかったことに気が付き、今愕然としている。

この選挙区は始めから小泉の当選が確定しているとすべての政党が認識し、あきらめているからか、選挙期間中、まじめで、真剣な政治や政策について議論が事実上皆無だった。つまり選挙公報であれ、選挙ビラであれ、政治や政策に対する、まともで、内容のある議論も論争も相互批判も全く存在しなかった。

ただ我々だけが、小泉と安倍政権に対する、あるいは他党に対する、それらの政治や政策に対する、実質的な、内容のある批判と議論を「愚直に、展開したにすぎないのだが、そうした我々の主張や見解や政治や政策に対して、小泉も共産党も何一つ批判はおろか、どんな一言半句さえ口にできなかつたのである。

選挙闘争は、諸政党や諸政治勢力がお互いに自らの政治や政策を明らかにし、有権者に自らの政治や政策に対する支持を得るために、必死で争う政治闘争の場であるという、議会制民主主義の本質的機能が全く失われているが、これはまさに現在日本の「議会制民主主義」の衰退と頹廃と危機を暴露する、究極の姿である。

安倍は選挙の開始時に、選挙後直ちに憲法改定策動開始と共に、アベノミクスを「再起動」し、教育無償化を含めた「具体案」を年内に策定すると宣言した。

しかしこの問題について、選挙区は289と多かったが、正面から、その安倍宣言を受けとめて真剣に検討し、それが新手のバラまき政策だと徹底的な批判を開始し、深めたのは、神奈川11区で闘う我々のみであった。

というのは、他のすべての党派は、事実上安倍政権の教育無償化という名のバラまき政策に大乗り気だったからである。

小泉との対決から安倍政権への対決へ

我々だけは直ちに、そして真っ正面から、安倍政権のこの政策に対する批判を開始したが、そんな闘いに手を染めようとする政党は全くなかった。

小泉も自分の選挙区で、安倍政権の新政策を説明して支持をえる活動など放棄して全国を回るの

に忙しかっただけであった、つまり11区の候補者としての、真摯な政治家としての責務を全く放棄した。そして我々の安倍政権や小泉に対する、全く正当な批判や異議申し立てを無視し、反論もしなかった、否、できなかった。

こうしたことは、客観的に評価すれば、議会政治家としての小泉の思い上がり、腐敗であり、責任の放棄でしかなかった。

かくして神奈川11区で、まともに、政治と政策について真理を語って闘ったのは、我々のみであった。

自民党の小泉も、共産党の瀬戸も、希望の党の真白も、我々との闘いを放棄し、事実上逃走した。

彼らは我々と対決する勇気も、信念も、またいうべき言葉も持っていなかった。情けない党、腐敗した党の候補者、まさに死んでいく党の候補者たちでしかなかった。

我々の選挙戦は労働者、勤労者の深部にまだ深く浸透することは、今回はかなわなかったが、しかしそうした闘いは開始されたのであり、そしてこの闘いは今後、真実の闘いであるがゆえに、自民党や小泉の権力を脅かし、墮落したえせ「野党」の影響を掘り崩す、労働者・働く者の力強い闘いとして発展して行くであろう。

我々の闘いに対する労働者・働く者の支持は票数には必ずしも結びつかなかったが、我々は闘っていて、労働者、勤労者の暖かい雰囲気は常に感じる事ができたとし、また候補者カーに対する「熱烈な」支持を表明する有権者に何人も出会う事ができた。我々の選挙公報やビラを読んで、あるいは我々の演説を聞いて、強い感銘を受けた労働者・働く者が現れつつあることを実感することもできた。

我々の選挙公報を点検した、いく人かの県庁の若い自治体労働者は、我々の公報を一字一句精読し、点検しなくてはならなかったのだが、その仕事を顔を紅潮させつつ行っている職員さえ見られたが、彼らは賃金労働者の1人として、我々の真剣で、ギリギリの闘いに何ものかを感じたことは確かであった。

神奈川11区は日本で最も空洞化し、腐敗した選挙区であった——というのは、真剣で、本気の政治闘争が存在しない、死んだように眠り込んでいる、完璧な「無風の」選挙区だったからである——が、しかし今回は、日本で一番重要な意義を持った、特別の選挙区——というのは、労働者党の真剣で、本気の、そして実際的な政治闘争が出現したから、断固たる政治闘争が一条の閃光のようにきらめき、貫徹した選挙区だったから——となったのである。

ある意味で、労働者党の断固たる闘いは、よどみ、形骸化し、死につつあったブルジョア民主主義や議会制民主主義を活気づけ、生き返らせたと言えなくもない。

我々は短い選挙戦を通して、労働者党の闘いとその意義についてさらに確信を強め、また大きな自信を持つこともできた。

我々の挑戦は始まったばかりである。次は再来年の春の統一地方選であり、夏の参院選である。我々の闘いの地平はさらに広がり、自民党と自民党政権に対する全面的な闘いへと一歩前進する。

我々はこれらの闘いでさらなる大きな戦果を上げ——我々は、少なくとも得票率3～5%を勝ち取り、5年後の勝利、つまり労働者党の国会議員の誕生を、4月の大会で確認している——、労働者の政治闘争の未来を大きく切り開いて行かなくてはならない。